

東国における古代民間仏教の展開

須田 勉

一 はじめに

日本の古代仏教には、王権を中心とした仏教と、民間層を基底に展開した仏教との二つの流れがある。前者は、天皇を頂点とした国家仏教であり、大化改新から天武・持統朝を経て、次第に国家体制の中に組みこまれ、僧尼令の制定をもって、一応、法的完成をみる。

一方、仏教伝来以来、渡来人などによって崇敬されていた仏教は、利他行による社会的実践を行った行基の活動で顕在化する。僧尼令施行直後の行基は、国家からの弾圧を受けるが、郷里に強制送還されたのちは、農村社会において三世一身法を背景に、池溝の開発や布施屋の建設など、さまざまな社会的実践活動を展開し、その後の仏教に大きな影響をおよぼした。

そうした、古代の民間仏教を考古学的方法で説明しようとする試みは、王権を中心とした仏教と比べ、資料的制約が多いこともあって、あまり活発ではなかった。その意味で、行基四十九院の位置付けや、

大野寺土塔・山崎院の文字瓦、狭山池での土木技術の解明などに向けての動きは、民間における仏教活動の実相を具体的に理解する上で貴重である^①。

一方、東国では、上総・下総を中心とした農村社会に、民間仏教の展開を跡づけるおびただしいまでの考古資料が検出される。私はかつて、そうした農村社会に展開した小規模な寺を、「村落内寺院」と呼び、その成立の背景を、豪族層によって主導された、八世紀後半以降の、農業開発やその他の生産活動に伴う豪族と農民との精神的結合の装置として位置付け、その維持・経営が、村落構成員の私出挙によって行われたことを推測したことがある^②。その際に対象とした遺跡は、わずかに五例であったが、その後の発掘調査の増大に伴って急増し、さまざまな構造の寺が存在することが明らかとなってきた。また、両総以外の地域でも類例が増加することによって共通の基盤が生まれ、研究もいっそう進展した^③。

古代における民間仏教の研究は、当時の農村社会に展開した仏教が、

いかなる仏教であったのかを問うにとどまらず、その受容と活動を主導した豪族層が、自らの信仰と同時に、律令的支配を克服するためのイデオロギー的手段として活用した、という側面を見落としてはならない。その意味では、国分寺や郡名寺院、さらには在来神などとうかがわっていたのかという問題も問わなければならないが、本小論では、両総地域での実態をベースに、八・九世紀における関東・東北地方の民間仏教の展開について素描してみたい。

二 両総地域の民間仏教

まず、両総地域の農村社会に展開した寺の性格を明らかにするため、仏堂の建物構造とそれとをとりまく付属施設の構成要素について検討しておきたい。

一類 仏堂が二つの建物からなる双堂形式の仏地と、その周辺の掘立柱建物・竪穴住居などからなる付属施設で構成される。竪穴住居や掘立柱構造の長大な僧坊を有する場合がある。仏地および付属施設を含めた寺院地は開放的で、ほとんどが区画施設を持たない(図一一)。

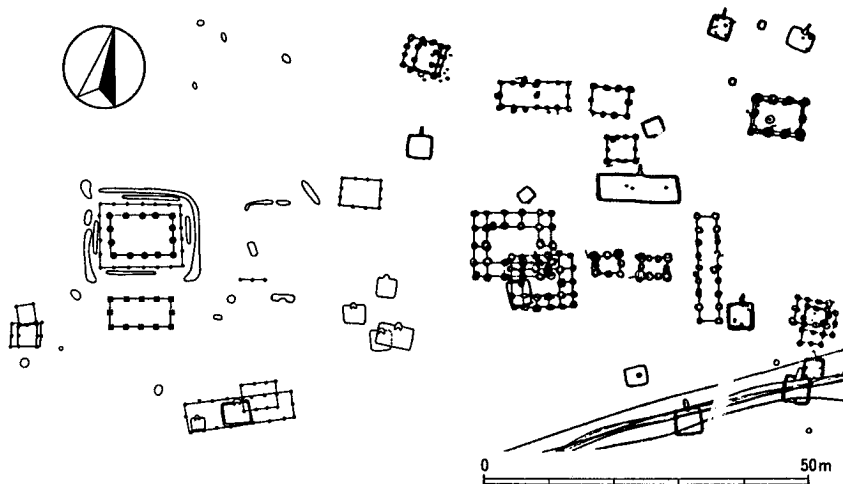
一。類例に、山田台遺跡(上総)、山口遺跡(下総)、双堂ではないが仏堂に礼拝空間を具備した多田日向遺跡(下総)などがある。また、長大な僧坊を持たない双堂の例として、郷部加良部遺跡(下総)、内野台遺跡(上総)、藪根不動原遺跡(相模)、高尾崎遺跡(常陸)、下悪戸遺跡(陸奥)などがある。主堂の多くは掘立柱構造の四面廂建物であるが、山田台・高尾崎遺跡は礎石建物、下悪戸遺跡は側柱のみの

建物である。

二類 四面廂建物・廂建物などの単堂形式の仏地と、長大な僧坊と竪穴住居・掘立柱建物とからなる付属施設によって構成される(図一二)。

一。類例に、遠寺原遺跡・萩ノ原遺跡・鷺山入遺跡(上総)、若葉台遺跡(武蔵)、寺畑遺跡(常陸)などがある。仏堂の多くは、身舎部を三間×三間とした五間堂であるが、鷺山入遺跡のように梁間を一間多く取り、南一間分に礼堂機能を持たせた、一類に近い例もある。

三類 四面廂建物の仏堂を仏地とし、掘立柱建物・竪穴住居の付属施設によって構成される。付属施設の中には、僧侶が止住する小規模な施設が含まれる可能性が高いが、構造上明らかにし得ないので、仏堂と付属施設で構成されるものを三類とした。仏堂の構造は多種におよび、類例も多い。仏堂建築の基本を踏まえた五間堂の例に、東郷台遺跡・針ヶ谷遺跡・砂田中台遺跡(上総)、白畑前遺跡(下総)、東京道南遺跡(武蔵)などがある。これ以外の構造では、身舎部を二間×二間とした織幡妙見堂遺跡(下総)、権田原遺跡(相模)、正面のみを三間とし、中央に扉を設けた小角田前遺跡(上野)のほか、二間×一間の長峰遺跡(常陸)、一間×一間の大井東山遺跡(下総)などがある。身舎を二間×一間とした場合でも、梁間の寸法を広く取るため平面は正方形に近い。五間堂以下の建物にみられるその他の特徴は、身舎部の柱掘方のみが大きく、さらに入側柱に対応しない例が多い。身舎内部は、本尊・脇侍・天部を配した仏教世界が展開したのではなく、本尊のみを安置する身舎部を覆う、覆堂的な構造であったと思われる。



1 山田台遺跡

2 遠寺原遺跡

図1 1・2類の堂宇と空間構成

四類 両廂および片廂構造の仏堂と竪穴住居で構成されるため、仏教遺物や墨書土器などの出土がない場合は、特定することが難しい。大椎第二遺跡（上総）は、三間×三間の正方形の身舎南面に廂をもつ。この場合の廂部には、礼拝上の機能を想定する必要がある。同様の例に、内野台遺跡（上総）の四面廂建物の南に孫廂をもつ仏堂がある。両面廂には、太田宿遺跡（下総）の三間×二間の身舎に南北廂、山口遺跡（下総）の五間×二間の身舎に南北廂を持つ例がある。太田宿・内野台遺跡には別に北廂建物があり、機能を明らかにし得ないが、類例としてあげておく。

五類 側柱のみの建物で、桁行方向に長い建物と桁行・梁行とが等しくなるものがある。前者には、集落内に存在する例と集落と離れた台地端部に竪穴住居と対である場合とがあり、一代限りの山林修業に伴う施設も含まれよう。類例に、大椎第二遺跡・中林遺跡・内野第二遺跡（上総）、六拾部遺跡（下総）、宮添遺跡（相模）などがある。後者は、瓦塔・瓦堂がまともな出土する例があり、それらを覆う覆堂的な性格を持つ建物であろう。類例に大野第七遺跡（上総）、谷津遺跡（下総）などがある。瓦塔・瓦堂の収納施設と推定される東山遺跡（武蔵）は、建物平面が正方形ではないが、建物規模と比べ柱掘方が大きく、仏教施設としての意識の反映と見られる。

以上、八・九世紀の農村社会や山間部に展開した仏教施設について五類に分類したが、構造・構成上からは、もう少し細分できよう。時期別の分類や立地・周辺遺構との関係などから性格を特定する必要がある。

あるが、ここでは、それぞれの出現時期について簡単に触れておきたい。

一類では、山口・郷部加良部遺跡が八世紀末ごろ、福島県下悪戸遺跡が八世紀末〜九世紀初頭ごろで、出現時期はほぼ共通する。山田台遺跡の創建は八世紀末ごろであるが、四面廂建物や僧坊が整備されるのは九世紀第Ⅰ四半期になろう。三類では、針ヶ谷遺跡が八世紀第Ⅲ四半期には成立するが、東海道南・織幡妙見堂遺跡は八世紀第Ⅳ四半期に位置づけられる。四・五類では、六拾部遺跡が八世紀第Ⅲ四半期、南河原坂・大野第七・宮添遺跡がやや早く、八世紀第Ⅳ四半期になろう。そうしてみると、一〜五類とも八世紀第Ⅳ四半期には成立するが、三・五類の出現がやや早く、その後一・二類の構造へと発展したことが理解できる。

笹生 衛は、一類の双堂形式と不空羼索観音を本尊とする東大寺法華堂の建物構造が類似することから、一類の建物は、密教修法の礼拝空間を確保するための構造であることを指摘した。^⑤ 双堂形式の建物は、本来二つの建物を機能上も外観上も一致させるため考案された建物で、構造上は、軒の出が接した部分の雨水の処理と、両建物の側面をふさぐ外壁の有無とが問題となる。東大寺法華堂の現状は、鎌倉時代に両堂をつなぐ屋根を設けたことと、縁の高欄を近世につくり替えるなどの後世の改変が見られるものの、基本的な構造については創建時の古式を失っていないことが、浅野 清によって指摘され、類例として浅野は、『西大寺資材流記帳』にみえる「十一面堂院」「四王院」をあげ

る。^⑥ 前者は、阿弥陀像を本尊として、十一面観世音菩薩、不空羼索菩薩などを配し、後者は、八角五重塔、火頭菩薩のほか四天王などの天部が置かれた。

そうした双堂形式の仏堂を、東国の農村社会に出現した遺構から復元してみたい。山田台遺跡の創建期の仏堂は、建物の四面に雨落溝があり、当初は、独立した側柱のみの二棟の建物で構成されていたことになる。その後、主堂が四面廂建物に建て替えられることによって軒の出が接し、双堂形式の仏堂が可能となった。郷部加良部遺跡の場合は、主堂と礼堂との建物間の柱間寸法が約十七・三尺ある。両建物との間に合いの間を想定した場合、それぞれ九尺弱の軒の出を取らなければならず、建物規模と比較してかなり大きな軒の出になる。東大寺法華堂の場合は、合いの間が二〇尺弱であるが、現状では軒先を接する谷合の水樋の位置に柱一列が置かれている。郷部加良部遺跡の場合にはこの柱列がなく、双堂に復元すべきか、独立した二つの建物を想定すべきかは、判断の難しいところである。これに対し山口遺跡の場合は、建物間の柱間寸法が約十五尺と狭く、双堂を想定することは可能ではあるが、両建物の軸線が一致しないという構成上の難点もある。しかし、この種の建物は、柱掘方の規模にバラツキがあったり、柱筋がうまく通らないなどの造営上の技術水準の低さが目立つ例が多いこともあり、ここでは、一応、双堂に復元しておきたい。福島県下悪戸遺跡、茨城県高尾崎遺跡については、両建物の間隔が狭いことから、合いの間をもつ双堂形式を想定することは可能であろう。

古代の建物で梁行を広く取るためには、廂を重ねるより方法がなく、双堂形式の仏堂は、礼拝空間を広く取るために考案された構造であろう。しかし、山田台遺跡にみられるように、独立した二棟の建物から双堂へと発展する過程を考えると、別棟であっても、双堂と同様の機能を果たした可能性もあろう。西大寺の場合は、同規模の二棟の建物からなり、資材帳には、「檜皮葺双堂二宇」と記されていることから、機能的に一体化した二棟の建物を双堂と称した可能性は残される。

そうした双堂形式の仏堂は、廻廊に囲まれた金堂前面の儀式空間に主眼を置いた伽藍配置から、礼拝空間を重視した構造上の変化ととらえることができるが、そうした修法を支えた他の施設はどうであったのであろうか。実際の遺構での比較例がないので、ここでは、「西大寺資材流記帳」を参考とする。資材帳にみられる十一面堂院は、檜皮葺双堂を中心に檜皮葺楼三棟、大小の檜皮葺僧坊が四棟と檜皮葺屋二棟で構成された。四王院では、檜皮葺双堂のほか、瓦葺房一棟、檜皮房四棟、檜皮屋一棟の構成である。屋根構造は基本的に檜皮葺で、建物構成の割には僧坊が充実している。西大寺での密教修法が盛んであったことを考えるうえで貴重である。

両院に共通した要素は、双堂+僧坊+屋で構成された仏地と僧地とをもち、西大寺のなかで、それぞれが院として独立して機能を果たしていたと考えられることである。今回分類した一類の双堂+僧坊+付属施設の形態はこれに類似し、密教修法を行う空間構成のみが、独立して東国社会に導入されたか、あるいは、畿内社会に独立した密教寺

院がすでに存在し、それが導入されたかのいずれかであろう。いずれにせよ一類型の寺は、集落や村落構成員の日常の活動範囲内に、独立して建てられた密教寺院と考えることができる。礼堂を欠いた二類型の場合も同様であろう。

東大寺法華堂の創建には諸説あるが、天平勝宝元年（七四九）九月付けの『正倉院文書』に羅索堂の記事が見え、西大寺の資材帳は、宝龜十一年（七八〇）の勘録であることから、この時期までに完成していたことになろう。一・二類型の寺は、少なくとも八世紀末葉には成立していたことから、関東・東北地方の農村社会には、かなり早い段階に密教寺院が出現していたことになる。

次に、仏具・僧具・墨書土器などの仏教関連遺物から、農村社会に広がった仏教信仰について触れておきたい。表1は、本尊を類推することのできる墨書土器を表にしたものである。地域的には、ほとんど両総地域に集中するが、仏教関連遺跡・遺物の出土数とはほぼ正比例した現象である。

寺畑遺跡出土の「千手寺」は、千手観音を本尊とした可能性が高く、同遺跡の「千寺」はその略称であろう。角田台遺跡、南西ヶ作遺跡の「千仏」もこの類に含まれよう。千手観音は千手千眼をもち、あまたの衆生を救済する変化観音であるが、その特徴は、何といっても多数の手にある。その像容から、「手寺」も千手観音を本尊とした寺と考えられる。「千侯」については、八日市場市柳台遺跡出土の瓦鉢に、「千侯□仏カ」がある。下総国匝瑳郡千侯郷に位置することから、郷

表1 仏像名をあらわす墨書土器

墨書名	器形	時 期	遺 跡 名	旧国名
釈迦寺	杯		鐘つき堂遺跡	上総
観音寺	杯	9世紀後半	多田日向遺跡	下総
□祥寺	杯		内野台遺跡	上総
千手寺	杯	9世紀中	寺畑遺跡	常陸
千寺	高台皿			
釈迦	合子	10世紀前半	織幡妙見堂遺跡	下総
手寺	杯	8世紀後半	野毛平植出遺跡	下総
千仏	杯		南西ヶ作遺跡	下総
	瓦鉢	9世紀前半	角田台遺跡	下総
千俣□仏カ	瓦鉢		柳台遺跡	下総
千俣	杯	8世紀前半	久ヶ台遺跡	上総
	高台皿	9世紀	大森天神台遺跡	下総
	杯	9世紀前半	鳴神山遺跡	下総
			古屋敷遺跡	下総
			国分遺跡	下総
ササ(菩薩)	杯	8世紀後半	竹袋天神台遺跡	下総
法 ササ	杯	9世紀中	砂田中台遺跡	上総
阿称寺	杯	9世紀後半	東林北遺跡	下野

名に関する名称と考えられている^⑩。しかし、「千俣」の墨書土器は、そのほかに、上総・下総に五例認められることから、特定の郷名と関連付けた解釈には無理がある。「千俣」とは、いくつにも分かれた形状を表現したもので、千手観音の像形を形容した地域的別称であったと考えられる。そのほか、竹袋天神台遺跡の「ササ(菩薩)」、砂田中台遺跡の「法 ササ」も雑部密教系の観音菩薩である可能性が高い。

その他、「釈迦」「釈迦寺」「観音寺」「□祥寺」「阿称寺」などがみられるが、9世紀中頃以降の例が多い。他地域では、福島県観音屋敷遺跡から出土した、文殊菩薩を表す梵字の「バン」^⑪、同県荒田目条里遺跡の、仁寿三年(八五三)銘の木簡と共伴して、「陀羅尼廿遍 大仏頂四返 千手悔過」などとメモ書きされた木簡があり、この地域での雑部密教信仰の広がりをうかがわせる。

この時期の地方の仏教を考えるうえで欠くことのできない資料に、「知識優婆塞等貢進解」がある^⑫。天平四年(七三二)から宝龜三年(七七二)までの年紀の明らかなもの九三通と、年月日を欠く断簡までを合わせると一〇四通が収録されている。そのうちの三八通に優婆塞の学習した經典と陀羅尼・呪名が記されている(表2)。吉田靖雄によると、秘部經典の学習がかなり多く、全体の約三八%をしめる。最も多いのが、「薬師經」で、この信仰の功德は、除病延命、無病息災など個人的欲求に根ざしたもので、七・八世紀を通して多い^⑬。その次に多いのが「千手經」で、この經典のもたらす功德は、現世利益に重点がおかれ、どの密部經典よりも功德の数が多い。その他に、「十一面神面呪心經」「不空絹索神呪心經」など多数ある。奈良時代の観音信仰は、玄昉が天平七年(七三五)に請来した五千余巻の經典と密接な関係をもつと考えられている。この時期以降、密教的観音信仰が急速に発展するが、速水 侑は、個人的な招福除災にとどまらず、当時の金光明最勝王經的鎮護国家仏教と密教的観音信仰が合致し、観音信仰が国家仏教の中に確固たる地位を占めていったと説く^⑭。観音信仰

表2 優婆塞貢進解の学習經典名一覧表（吉田靖雄1995による）

註 番号に○印は秘密經典

被貢進者の学習經典平均値	合計	22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1																				名稱	
		その他	大般若經	維摩經	梵網經	如意輪陀羅尼經	虛空藏菩薩經	八各普密陀羅尼經	阿彌陀經	金剛般若經	弥勒經	不空羼索神呪心經	大般若槃經	十一面神呪心經	觀世音經	仏頂尊勝陀羅尼經	理趣經（大般若經理趣分）	大通方広經	般若波羅密多心經	千手千眼広門満無礙大悲心陀羅尼經	薬師瑠璃光如来本願功德經		妙法華經
五・八	二三・一	一	三	二	二	二		二	六	八	〇	一	〇	二	五	一	四	七	一	八	三	三	八
二・三	九・二	一				三	三	四	二			一	一	一		一	三	一	四	八	二	二	五
八・四〇	三三・三	二	四	二	二	二	三	三	六	八	八	〇	一	一	一	三	五	一	七	一	二	二	四
二〇・一	二〇	四		一	一														二	二	二	一	
一五・三	四五	五					二	二	一		二	二	二	二	二	四	一	五	四		一	四	四
二〇・一	一二	一	一									一	一	一				四		一	一	二	
八・八二	一〇・六	六	二	一	二		一	五	五	四	二	四	四	三	八	九	六	五	八	八	三	〇	
八・一六	四九		六	一		一	一		一		二		二	三	三	一	一	二	六	三	五	八	
四・一	四							一						一				一		一			
二・三三	七							一							一	一			二	一	一		
六・二三	八〇	二						二	一	三	三	一	三	五		六	六	七	六	八	一	六	

にもとづく現世利益は、護國的功德と個人的功德の二つを抱括していたのである。その意味においては、八世紀後半ごろから両総や陸奥南部域に広がった千手観音を中心とする仏教信仰は、律令国家の枠組み

を否定するものではなかったといえよう。八世紀中ごろの時期は、行基集団による唯識論的思想に基づく仏教の社会的実践活動が、国家から全面的に容認され、天平十三年（七四

一)以降、労働奉仕による得度の認可は急激に拡大し、天平末年を頂点として、臨時得度だけでも一万人をこえたという。⁽¹⁷⁾一方、豪族や上層農民にとっては、動揺する農村社会の中で、農民掌握の新たな実践論を形成するためのイデオロギーとして、優婆塞に密部観音信仰の学習を期待した、といった俗界の社会的・経済的動向も考える必要がある。優婆塞貢進が行われた三五か国のなかで、畿内以外では、上総国が尾張国に次いで二番目の件数を示すという事実は、重視すべきであろう。

両総地域から出土する仏具・僧具には、瓦塔・香炉・香合・瓦鉢・水瓶・浄瓶・灯明具・托などがみられる。「陀羅尼集教」三での仏供養は、二二種類の供養具が説かれているが、最低限必要なものとして、香水・焼香・雑草・燃灯・飲食の五種がある。香炉・花瓶・燃灯を一組とした三具足は、形式化されたものとされている。⁽¹⁸⁾すべての遺跡からではないが、香合・香炉・水瓶・燃灯具・瓦鉢が出土し、最低の密教法具はそうなることになる。実際には、三具足で密教修法が行われる場合もあったのであろう。ここでは、両総地域から多く出土する瓦鉢について検討しておきたい。

千葉県文化財センターがまとめた瓦鉢の出土例は五三遺跡にのぼる。⁽¹⁹⁾そのうち、郡名寺院などの本格的な瓦葺建物を有する寺院からの出土例は三遺跡のみで、その他は村落内寺院から一一例、他の仏教遺物との共伴例が三九遺跡を数える。ほとんどが集落遺跡からの出土であり、関東圏でも他地域を圧倒した現象がみられる。実測図が掲載された六

八個体のうち、須恵器一五個体、土師器五一個体、不明二個体で、土師器の瓦鉢が圧倒的に多い。「千仏」「佛」「鉢」などと墨書されたものもある。八世紀第三四半期に出現し、その後次第に増加し、九世紀前半にピークを迎える。この現象は、村落内寺院の展開過程と同じ動きを示し、密接な関係にあったことは明らかである。

僧尼令五非寺院条によると、乞食行を望む比丘・比丘尼は、精神練行の徒であるか否かを所屬寺院の三綱によって審査され、京以外では、郡司を経て国司によって判許されるといった厳しいものであった。八世紀後半以降の両総地域を中心とした農村社会では、乞食行に関し、もはや僧尼令の世界は存在しないに等しい状況にあったことを説明するに十分な資料である。乞食行は本来、釈迦以来の仏教教団が果たした修行の一つで、比丘の食物は乞食行によって賄われるべきものであった。僧具としての鉢は、乞食行を行う出家者と、一紙半銭の喜捨をする俗人とがいて、両者の間に鉢が存在した。瓦鉢の出土数から考えると、八世紀後半から九世紀の両総地域を中心とした農村社会では、そうした乞食行が日常的に行われていたことが想定される。しかし、そこで使用された瓦鉢は、ほとんどが土師器である。しかも、瓦鉢と判断するか否か迷うものまである。⁽²⁰⁾そうした、瓦鉢の品質や形態を考えると、正式な官許の手続きを経ない出家者が、かなり含まれていたことを推測させる。

農村社会での乞食行を通じて説かれた仏教は、開発地に建てられた密教寺院や、「千仏」「千寺」「千手寺」などの墨書土器の存在から、

秘部教典に基づいた、きわめて現実的な招福除災の因果論や、七世父母に対する観念論であったと思われる。その場合、乞食行に伴う在家からの喜捨の使途が、何であったのか重要な問題になる。そのことを考古資料の中から説明することは難しいが、新しく開発した土地に豪族・農民・僧が相互に協力して寺を建て、寺を中心とした僧俗一体の集団の形成を目指したことを考えると、自立できる経済力を持つ自己および集団を築き上げるための保全と同時に、集団に新しく参加する人的資源を確保し、さらに集団を拡大する役割を果たしたのであろう。そうした事柄を、もう少し具体的に知るために、墨書土器を参考に考えてみたい。

両総地域では、約四二〇の遺跡から一万点をこえる墨書土器が出土する。⁽²²⁾そのうち、仏教に関連した、「寺」「仏」の両者およびいずれかが出土した遺跡は九七遺跡にのぼる。⁽²³⁾そのほか、仏教に関連して民衆の願望を表したと思われる、「富」「吉」「得」「福」「万」「千」などの吉祥語が出土した遺跡は一〇八遺跡におよぶ。そうした吉祥語は、東日本の集落遺跡に一般的にみられる共通した語であるが、特に、両総地域から集中して出土する。それらは、一字のみで出土する場合もあるが、「福得」「福吉」「万得(得万)」「千万(万千)」など、吉祥語同士の組み合わせや他字との組み合わせ、例えば「大福」「私得」「福加」「万加」などがみられる。その他、これらの文字や仏教遺跡との関連で、則天文字や篆書体などを受け、日本独自に作られた特殊文字もある。⁽²⁴⁾富には、「大富」「富得」「富酒」などがあり、現世での富の

獲得を願望した語と思われる、「福得」「万加」「万福」なども致富につながる吉祥語であろう。福島県観音屋敷遺跡からは、文殊菩薩をあらわす梵字「バン」と同じ杯に、「万福」「上万」と墨書された土器があり、供物を添えて文殊菩薩に願上したものであろう。そのほか、「私得」「得加」「万得」など得の文字が目立つ。

仏教用語としての得は、おのれに得たものをその身につなぎ止めておくことをいい、「獲」と⁽²⁵⁾成就とがある。前者は、まだ得していないもの、後者は、すでに得し終って今なお失われていないものである。⁽²⁶⁾墨書土器に見られる得は、前者を指すのであろう。そのほか、「利多」「財備」「豊」「宝」などもこの類に含まれよう。

吉田靖雄は、「千手経」の呪を誦する者の現世に得る利益を、精神的・環境的・社会的・物質的・健康的満足の五つをあげる。⁽²⁶⁾いずれも人間の本質にかかわる問題である。『日本霊異記』には、「千手経」に関する話が三例おさめられている。三話とも病氣や肉体的苦痛が、「千手経」の呪で快癒するといった話である。いずれも健康的満足に相当し、墨書土器に当てはめると、「福」「吉」などに相当しよう。しかし、両総地域の集落遺跡にみられる墨書土器の内容は、「富得」「万得」「利得」「財備」「利多」「万加」「財」「宝」などの出土が多く、むしろ、物質的満足に対する欲求をあらわした語句が顕著のように思われる。これは、「千手経」の説く、「所有財宝無他却奪」(第十一)、「十一面経」の「財宝衣食愛用無尽」(第三)、「不空羂索経」の「多獲財宝」(第八)などに相当する。墨書土器に見られる吉祥語は、

秘部經典の内容を簡潔に表現したものとえよう。秘部經典に説く私富の蓄財は、仏教倫理のうえで、何ら否定されるべき事柄ではないのである。²⁷⁾むしろ、勤勞↓富の蓄財↓布施行は、菩薩の利他行そのものといえよう。

長山泰孝は行基の活動について、一般農民はともかく、国家に仰圧されていた豪族は、行基の教えに従って仏教の力に頼り功德を積みながら、致富をめざして生産に励み、それが、彼らの活動を内面から支えたという。²⁸⁾豪族層の内面にまで踏み込んだ鋭い指摘であるが、両総地域から出土する墨書土器のあり方から考えると、豪族層のみが致富を願って仏に頼ったのではあるまい。富を築く機会も手段も与えられなかった一般農民にとって、仏や経の説くところに従って勤勞を積むことで、それが仮に幻想であったとしても、私富の蓄財が可能となる世界が開かれてきたという点で、農業開発やその他の生産活動を主体的に進めようとする豪族と、それに従属する農民とが、内面において結合するイデオロギーとなったのであろう。そう考えると、両総地域を中心に展開した村落内寺院は、まさに、現世利益を多く説く雑部密教を中心にすえた、豪族と農民とのイデオロギー的結合の装置として機能したことになる。

そうした、寺と結合した農業開発は、中国僧の実践活動にも例がなく、行基独自の形態であったと、吉田靖雄・栄原永遠男は指摘する。²⁹⁾もしそうであれば、八世紀後半から九世紀にかけて両総地域の農村社会に展開した、開発↓造寺↓乞食行↓布施の実践活動は、豪族や一般

農民と結合した行基の農業開発に対する活動方法と類似する。その場合、寺を中心とした農業開発の方法が、両総地域の社会の中から独自に創出されたものか、それとも、直接的・間接的であれ、行基の思想や方法が導入されたのかのいずれかである。私は、後者の可能性が高いと考える。

しかし、この時期、両総地域の農村社会に展開した寺のすべてが、農業開発やその他の主産活動と直接的に関連していたとは思われず、さまざまな構造の寺の存在や、立地上の問題などを考えると、村落共同体内部での結合を軸に、多面的な仏教活動へと発展していったのであろう。

三 北関東と東北の民間仏教

ここでは、両総地域を中心とした農村社会に展開した民間仏教をベースに、北関東と東北地方の状況について触れておきたい(表3)。

まず、仏堂の遺構をみると、一類とした双堂形式の仏堂は、福島県石川町下悪戸遺跡と、茨城県鹿島市高尾崎遺跡に類例がみられる。前者は、三間×二間の側柱のみの二棟の建物からなるが、両建物の間隔が約2mと狭く、合いの間を設けた双堂形式の仏堂を想定することができる。柱掘方はほぼ方形で一辺1mを越え、柱痕跡が平均で三六cmと一般集落内の建物と比べ規模が大きく、構造のうえから両建物が特別の施設であったことをうかがわせる。周辺には、堅穴住居と掘立柱建物がみられる。八世紀末から九世紀初頭ころの土器に、「宮寺」

表 3 村落内寺院一覧

旧国名	遺跡名	主な建物	仏教関連遺物	時期
陸奥	下悪戸	双堂	宮寺・寺・□寺	8 末～9 c
	達中久保境A	四面廂	富・千万・豊・真・本	9 c
	観音屋敷	側柱？	万福・上万・梵字「マン」	9 c～10 c
				9 c
常陸	高尾崎	双堂	万福・福得・長谷寺、瓦鉢	8 末～9 c
	長峰	四面廂	千手寺・千寺、瓦鉢	9 c
	寺畑	四面廂・僧坊	佛、瓦鉢、灯明皿	〃
	ヤツノ上	側柱	寺・神屋・新安・乞	〃
	幸田台	〃	佛、瓦鉢、瓦塔、瓦堂	〃
	根鹿北	〃		〃
下総	谷津	〃	瓦塔、瓦堂	〃
	白幡前	四面廂	佛・大寺・瓦塔、瓦鉢	〃
	大塚前	四面廂・僧坊	下総国分寺と同茫瓦	8 c 後
	六拾部	側柱	白井寺、瓦鉢、香炉、香合、瓦塔	8 c 後～9 c
	江原台	基壇？	寺、瓦塔	9 c
	井戸向	側柱	寺・佛・富・豊、瓦鉢	8 c 後～9 c
	高岡大山	〃	寺・佛・神・神屋、香炉	〃
	太田宿	四面廂・片廂	芳、瓦鉢	9 c
	北大堀	側柱	寺・佛杯・神屋、灯明皿	8 c 後～9 c
	伊篠白幡	〃	俣、香炉、灯明皿	9 c
	飯仲金堀	〃	寺、香炉、三彩托	8 末～9 c
	大井東山	四面廂	新生寺、灯明皿、三彩小壺	〃
	織幡妙見堂	〃	釈迦・佛、香炉、瓦鉢	9 c
	多田日向	四面廂・僧坊	三綱寺・多理草寺・観音寺	〃
	郷部加良郎	双堂	忍保寺・私得・神奉、瓦鉢	8 末～9 c
	山口	双堂・僧坊	忠寺・成・佛、瓦鉢	〃
	久能高野	側柱	桑田寺・郡司進上代・寺	〃
	野毛平植出	〃	千寺・信・浄・中	〃
	鳴神山	〃	佛・千俣、瓦鉢	〃
	大袋小谷	四面廂・片廂	寺・門殿	〃
	北海道	側柱	勝光寺・天・善	9 c 前
上総	南大広	基壇	寺、瓦、鎖壇具	9 c
	萩ノ原	四面廂・僧坊	寺・塔寺・仏、香炉、瓦塔	8 c 後～9 c
	東郷台	四面廂・片廂	寺・四佛、香炉、瓦塔	〃
	遠寺原	四面廂・僧坊	士寺・山寺、瓦鉢、香炉、瓦塔	8 c 後～9 c
	針ヶ谷	四面廂		8 c 後
	内野台	双堂	祥寺・祥	〃
	大椎第 2	片廂	寺・福、瓦鉢、三彩小壺	8 c 後～9 c
	山田台	双堂・僧坊	瓦鉢、香炉	8 末～9 c
	南河原坂第 2	側柱	考、瓦鉢、灯明皿	9 c 前
	大野第 7	側柱	佛、灯明皿	〃
	砂田中台	四面廂	寺・佛・法、瓦鉢、二彩	8 c～9 c
	中林	側柱	瓦鉢、香炉、灯明皿	9 c 前
	内野第 2	〃	国（則天）、瓦鉢	9 c 中
	庄作	〃	佛酒・国玉神奉、瓦鉢、瓦塔	8 c 後～9 c
	作畑	〃	弘貫・寺、瓦鉢	9 c
	南麦台	〃	殿寺	8 c 後～9 c
	上ノ山A	四面廂	灯明皿	〃
相模	鷺山入	側柱・僧坊	仏・寺・徳	〃
	滝東台	側柱	三井寺・得万	〃
	上大城	〃	瓦塔、瓦堂	〃
	鐘つき堂	両面廂	釈迦寺・□祥寺・寺東・万万	〃
	権田原	四面廂		〃
	宮添	側柱	瓦塔、三彩	〃
	馬場	礎石	寺	〃
	南鍛冶山	南面廂	寺・一万・佛□	〃
	下ノ根	〃	寺芳・一万寺・守寺	〃
	愛名宮地	三面廂・基壇	寺・山、瓦塔、瓦鉢	8 c 後～9 c
	藪根不動原	双堂		〃
	拝堂	側柱	寺	8 c
上野	戸神諏訪	基壇	宮田寺・造佛・寺	8 c 後～10 c
	小角田前	四面廂	吉・吉人・豊	〃
下野	東林北	総柱？	阿称寺・栄	9 c 後
	堂平	礎石	金銅如来像、灯明皿	9 c～10 c
	辻の内	四面廂	獸脚、瓦鉢	9 c 後
武蔵	東山	側柱	瓦塔、瓦堂	9 c 初
	東京道南	四面廂	瓦鉢、火打金	8 c 後
	若葉台	四面廂・僧坊		8 c～9 c

「寺」「□寺」などと書かれた墨書土器がある。この地点には、徳一開基の薬師堂があったという伝承が残されている⁽³⁹⁾。

後者は、七間×四間に復元できる基壇建物の正面中央に、三間×二間の掘立柱の礼堂を付設した双堂建物である。両建物の周囲を巡る溝があり、二つの建物が一体として機能していたことは明らかであろう。周辺にある掘立柱建物との切合い関係や方位の異なる建物が存在することから、当初からの構造であったのかは明らかではない。瓦二片を出土するのみにて、瓦葺建物を想定することは難しい。『神明鏡』には、「南都にいた徳一は、法相擁護の春日・鹿島の加護を頼って常州鹿島下りし、(中略)常陸国内に数十か所の寺院を建立した。多くの観音・薬師が本尊である。」と伝える⁽⁴⁰⁾。徳一建立の恵日寺は磐梯山を、中善寺は筑波山を抱き、徳一の仏教が、在来神と結合していたことは明らかである。両遺跡には、両総地域で見られるような長大な僧坊はないが、周辺の掘立柱建物の中に、僧坊機能を想定することは可能であろう。そのほか、横浜市藪根不動原遺跡に桁行の長さを同じくした双堂があり、双堂形式の仏堂は、東海道に沿って展開するという特色がみられる。

二類としたものには、埼玉県鶴ヶ島市若葉台遺跡がある。六間×五間の四面廂建物の北に三間×二間、西に六間×二間の長大な建物を配し、それぞれの建物が計画的に建てられている。仏堂は身舎部の柱掘方が大きく、この時期の仏堂建物の構造上の特徴が見られる。周辺から奈良三彩が出土する。この遺跡は、八世紀第Ⅱ四半期頃に武蔵国人

間郡と高麗郡との郡境域に突然出現し、多数の掘立柱建物と堅穴住居によって構成される。一軒の堅穴住居から、数千点にのぼる須恵器が出土するなど、異常に須恵器が多い。瓦鉢や佐波理模倣碗などの仏教関連遺物も目立つ⁽⁴²⁾。郡の生産に関わる遺跡と仮定すると、寺のもつ性格は、両総地域の遺跡と類似することになる。

若葉台遺跡の近隣に所沢市東京道南遺跡がある。長大な僧坊を持たないが、五間×四間の仏堂と掘立柱建物・堅穴住居によって構成されるこの寺は、若葉台遺跡と同じ入間川流域に属し、同様の活動が行われた可能性がある。福島県相馬郡境A遺跡も、長大な建物を持たないが、四間×四間のほぼ正方形に近い四面廂建物を中心に、掘立柱建物・堅穴住居・土壇によって構成される。構造上不審な点もあるが、仏堂前面にも三間×一間の建物があり、一類の双堂建物になる可能性もあろう。

三類以下の建物は、四面廂建物・廂建物・側柱建物と構造はさまざま、類例も多い。しかし、東山道の両毛地域では、発掘調査が進んでいるにもかかわらず、類例が少ない。管見で知る限りでは、上野が沼田市戸神諏訪遺跡、尾島町小角田前遺跡、下野が那須町堂平遺跡、壬生町東林北遺跡で見られるのみである。戸神諏訪遺跡の建物構造は明らかではないが、正方形に近い基壇建物を中心に、掘立柱建物・堅穴住居が分布し、さらに、それらを溝によって区画する。仏堂は周囲の雨落溝から少なくとも三回の建替が認められ、「造佛」「宮田寺」「寺」などの墨書土器を出土する。小角田前遺跡は、正面に扉をもつ

た二間×二間の身舎に三間×二間の廂を持つ仏堂で、瓦塔を出土する。身舎部と廂部の柱が一致しない覆堂構造の仏堂で、福島県達中久保遺跡、茨城県長峰遺跡、千葉県大井東山遺跡、神奈川県権田原遺跡など類例が多い。構造的には、東海道沿いに多く見られる形式である。「阿称寺」の墨書土器を出土した栃木県東林北遺跡は、仏堂建物としては構造上不審な点が多い。四面廂建物の堂平遺跡は、瓦をもたない礎石建物で、仏堂としての基本を備えたものである。近隣の釈迦堂廃寺には徳一創建伝説があり、後述するように、この地域は徳一教団の活動圏であった可能性がある。

以上のように、八・九世紀に両総地域の農村社会に、村落や集落単位にまで広がった寺の分布は、上野・下野・北武蔵地域にはあまりみられない。今後、発掘調査が進んだとしても、この傾向は大きくかわることはないと思われる。そうした点では、相模地域に見られる特徴は、⁽³³⁾両総に近い状況にあったことを指摘できそうである。

瓦塔は、東日本各地で多く見られる仏具であるが、何といっても北武蔵から上野地域に分布の中心がある。群馬県新里村の山上多重塔は、塔信仰に対する強い地域の特性をよくあらわしている。その銘文には、僧道輪が、朝廷・神祇・父母および無間の苦を受ける衆生を救済し、彼岸に成仏できるよう、延暦二〇年（八〇一）、如法經（『法華經』であろう）を安置するために、三重塔を建てたことが記されている。この地域に広がった法華經と塔信仰との結びつき、さらに神仏習合の様相が具体的にわかる例である。

最澄の法華一乗主義に基づく六所宝塔構想は、最澄の理想を具体化する目標の一つであり、安東の上野緑野寺と安北の下野大慈寺に造営することが計画の第一であった。法華經では、仏道をなす方法の第一として造塔をあげるが、北武蔵・上野で出土する瓦塔は、最澄が東国入りした九世紀初頭ごろから増加する。両毛・北武蔵地域の農村社会において、独立した寺が少ない理由の一つは、道忠教団に支えられた緑野寺と大慈寺の二つの拠点をもったことと、個別地域においては、塔信仰に支えられた仏教信仰が展開したことによる可能性もある。

墨書土器は、八世紀前半から後半にかけてあらわれはじめ、九世紀前半期ごろから増加する傾向は、東日本各地でみられるほぼ共通した現象である。前述した、「寺」「仏」などの墨書土器のほか、「福」「富」「得」「吉」「万」「豊」などの吉祥語、あるいは、それとの組み合わせからなる語句も各地で出土する。しかし、ここでも出土量や記載内容において地域的偏差が認められ、その対極となるのが、両毛と両総地域であろう。ただ、部分的には、小角田前遺跡の「吉」「吉人」「豊」、群馬県川上遺跡の「得」「称」「慈」などの吉祥語が集中してみられる遺跡もあるが、大勢としての認識は変わらないであろう。むしろ、両総地域に共通した現象は、福島県御山千軒遺跡・上吉田遺跡・松並平遺跡など陸奥南部域で多く見られ、陸奥南部地域や常陸・相模など、東海道から陸奥へのルートに沿って分布する。經典や呪に基づく仏教信仰の内容や活動方法などによる違いが、地域差となっており、われたのであろう。

四 まとめ

八・九世紀における両総地域の農村社会に展開した民間仏教をベースに、北関東・東北の状況を概説してきたが、各地域にみられる特徴をまとめると、次のようになる。

(1) 農村社会に、集落や村落を単位とした小規模の寺をほとんどみず、仏教や仏教信仰に関する墨書土器や仏具・僧具が比較的少ない割には瓦塔を多く出土する特徴は、上野・北武蔵に共通する。おそらく、上野緑野寺・下野大慈寺を拠点とした道忠教団の活動圏を示す現象であろう。

(2) 会津を中心とした陸奥南部地域の農村社会の中に、瓦葺建物を持たない寺が比較的集中し、仏教や仏教信仰に関する墨書土器を多く出土する。仏堂の建物構造や墨書土器の内容は、むしろ、両総地域との共通点がみられる。会津恵日寺を中心に仏教活動を展開した徳一教団に関連した遺跡と思われるが、徳一は、筑波山中禅寺にも拠点をもち、さらに鹿島神宮・神宮寺との関係から、常陸もこの圏内に含まれる。

(3) 農村社会の集落や村落単位、さらに山間部にも寺が存在し、仏具・僧具や仏教信仰に関連する多くの墨書土器を出土する。両総地域を中心に、北は霞ヶ浦北岸、東は相模にまで広がる地域である。

徳一の創建伝説を持つ寺院は、塩入亮忠・由木義文によると、福島二四、茨城三、栃木三、山形一、群馬一である。下野の例は、那須・

塩谷・芳賀郡にあり、いずれも、陸奥・常陸に接した地域に分布する。橋本澄朗が指摘したように、この地域は須恵器の製作技法をとっていても、常陸文化圏の様相が強く、大慈寺のある三龜山山麓を中心とした技法とは異なる。伝承を根拠とするわけにもいかないが、(1)と(2)の教線は、八溝山脈の西麓にあったと推定される。その山脈の南端に筑波山・加波山がある。最澄と徳一との宗教教学上の論争は、実は、最澄が東国入りする以前からの徳一と道忠との教線伸張をめぐる争いでもあり、八溝山脈は、両教団の教線そのものであったのであろう。近隣に徳一伝承をもつ那須町堂平遺跡などは、会津↓白河↓那須↓へと東山道沿いに南下した徳一教団の布教圏であった可能性がある。今後、那須地域や八溝山脈西麓の考古学的成果が注目される。

道忠教団の南限にあたる武蔵は、池田敏宏が指摘するように、荒川以北・以南地域と多摩川流域の三地域に分けられる。⁽³⁵⁾荒川以北は、歴史的に見ても上野の影響が強く、荒川南部の中部域は、両地域の影響を受けたところである。この中部域には、若葉台遺跡や東京道南遺跡のように、上野地域にはあまりみられない構造の寺が存在し、ほぼこの地域が南限であったと思われる。

一方、(2)と(3)の教線は霞ヶ浦北岸にある。この地域は、常総型埴輪や箱式石棺、埴丘裾に内部主体を持つ古墳の分布などにみられるように、大化前代からの文化圏の境をなす。霞ヶ浦北岸の長峰遺跡にみられるような、両総的在り方は、ほぼ当時の文化圏に沿って広がったこととなる。そう考えると、徳一教団の活動範囲は、北は陸奥から南は

常陸の霞ヶ浦北岸、および太平洋側の鹿島地域、東が一部下野を含む八溝山脈西麓にあったと考えられる。以上のように、徳一教団も道忠教団も、ほぼ当時の文化圏に沿って布教圏を拡大したことが推測できるが、常陸南部で相接する両総地域と徳一教団の関係はどうだったであろうか。

徳一は、興福寺僧修円から法相唯識の教学を学び、法僧教学の立場から最澄と教学上の論争を展開したことで名高いが、興福寺は、南都の仏教界に密教を広めた玄昉との関係も強く、徳一が密教の影響を受けていた可能性は高い。徳一の活動の中心となった会津周辺からは、下悪戸遺跡で見られるような礼堂を具備した密教修法を行う双堂の存在が認められることや、観音屋敷遺跡からは、文殊菩薩を表す「マン」の梵字と同じ土師器に、「万福」「上万」などと書かれた九世紀中頃の墨書土器を出土する。また、いわき市荒田目条里遺跡からは、仁寿三年（八五三）銘をもつ木簡と供伴して、「陀羅尼廿遍 大仏頂四返 千手悔過」などと陀羅尼呪の読誦回数や千手観音による悔過を行うメモ書きに、僧名と俗名の書かれた木簡が出土した。大仏頂は、仏頂陀羅尼の略称と思われ、いずれも陀羅尼呪に基づく修法が執り行われていたことを示す資料である。

こうした考古資料を、ただちに、徳一の布教活動と結びつけることはできないが、舞台は会津および会津周辺であること、伝承ではあるが、いわき市には徳一創建伝説を持つ寺院が最も集中すること、さらに、八世紀末から九世紀中頃の資料は、徳一の生前から死後間もない

ことであることなどを勘案すると、いずれも、徳一の布教活動との関連で出現した遺跡である可能性は高いといえよう。

一方、両総と常陸南部域を中心とした地域では、密教的修法を執り行う双堂形式の仏堂が多く分布し、墨書土器から知られる、「千手寺」「手寺」「千仏」「千俣仏」「菩薩」などは、いずれも秘部經典に基づく本尊であり、多数出土する香炉もその修法との関連が考えられる。そうした、考古資料の特徴からみる限り、徳一教団の布教圏と両総地域に展開した仏教には、むしろ、多くの共通点が認められるのである。

以上のように、八・九世紀における関東・東北地方における民間仏教には、両総地域を中心に展開した雑部密教と、会津から東山・東海道沿いに南下した法相教学の徳一教団とが東海道を中心に広がったのに対し、天台宗と結びついた道忠・広智教団が両毛・北武蔵の東山道沿いに展開するといった二つの流れが存在した。徳一・道忠教団とも地縁的結合関係をベースに布教活動を展開したことを考えると、両教団とも、長い間はぐくまれた歴史的条件を無視し得ない中での布教圏の伸張であったと思われる。今後は、地域における考古学的分析を重ね、これらのことを跡づける必要がある。

本小論をまとめるにあたり、阿久津久・橋本澄朗・堤 禎子・河野 一也・國井弘紀・近藤康司・斎藤 稔の諸氏に種々ご教示をいただいた。謝意を表する次第である。

註

- (1) 摂河泉古代寺院研究会『行基の生涯を考古学する』第二回摂河泉古代寺院フォーラム 一九九八
- (2) 須田 勉「平安初期における村落内寺院の存在形態」『古代探叢』Ⅱ 一九八五
- (3) a 今泉 潔「建物と瓦の相克」『研究紀要』一二 千葉県文化財センター 一九九〇
- b 笹生 衛「村落内寺院」における堂宇建物と仏教信仰」『野中徹先生還暦記念論集』一九九一
- c 笹生 衛「古代仏教信仰の一側面」『古代文化』四六巻二号 一九九四
- d 富永樹之「村落内寺院」の展開(上)」『神奈川考古』第三〇号 一九九四
- e 富永樹之「村落内寺院」の展開(中)」『神奈川考古』第三一号 一九九五
- f 富永樹之「村落内寺院」の展開(下)」『神奈川考古』第三二号 一九九六
- g 平野 修「古代仏教と土地開発」『帝京大学山梨文化財研究所報告』第七集 一九九六
- h 千葉県文化財センター「古代仏教遺跡の諸問題」『研究紀要』十八 一九九六
- i 阪田正一「古代房総の民衆と仏教文化」『考古学の諸相』一九九六
- j 笹生 衛「古代集落と仏教信仰―千葉県内の事例を中心に―」『仏のすまう空間』一九九八

(4) 註3b論文

(5) 浅野 清「東大寺法華堂」『奈良時代建築の研究』一九六九

(6) 「西大寺資材流記帳」『寧楽遺文』宗教編下

(7) 「西大寺資材流記帳」

十一面堂院

檜皮葺双堂二字 長十一丈五尺、広十丈五尺、蓋頭在竈吉廿八枚

中檜皮葺楼 長五丈、広二丈

東西各檜皮葺楼 長二丈、板敷二重

東檜皮葺僧房 長七丈、広四丈

西一檜皮葺僧房 長七丈、板葺

西二檜皮葺僧房 長三丈、板葺

西三檜皮葺僧房 長四丈五尺、板葺

西北檜皮葺屋 長一丈四尺、板葺

南檜皮葺門屋 長三丈二尺五寸、広二丈

(中略)

四王院

檜皮葺双堂二字 各長十一丈八尺、六尺、蓋頭在竈吉廿八枚

東南葺瓦房 長九丈、広四丈

西南檜皮葺房 長九丈、広四丈

東北檜皮葺房 長五丈七尺、広三丈六尺七分

次檜皮葺小房 長五丈六尺五寸、広三丈六尺

次檜皮小房 長五丈六尺五寸、広一丈四尺

檜皮小屋 長一丈八尺、広一丈八尺

(8) 註3bで、雑部密教の観音や天部であるとする笹生 衛の指摘がある。

- (9) 註3 hに同じ。
- (10) 宮内勝巳「飯塚遺跡群」『千葉県の歴史』資料編考古3 一九九七
- (11) 福島県耶麻郡猪苗代町教育委員会「観音屋敷・田辺館跡」一九九〇
- (12) いわき市教育委員会『木簡の語る古代のいわき』一九九五
- (13) 『寧楽遺文』宗教編上
- (14) 吉田靖雄『日本古代の菩薩と民衆』一九八九
- (15) 速水 侑「奈良朝の観音信仰について」『観音信仰』一九九一
- (16) 『続日本紀』天平十三年十月癸巳条 この時、加世山の東の河に橋をかける造営事業に従事した優婆塞七五〇人が得度された。
- (17) 中村明蔵「優婆塞貢進解について」『続日本紀研究』第七―第十一
一九六〇
- (18) 『仏具大事典』鎌倉新書 一九八三
- (19) 註3 hに同じ
- (20) 註3 hに同じ
- (21) 註14に同じ
- (22) 千葉県史料財団編「出土文字資料集成」『千葉県の歴史』資料編 古
代別冊 一九九五
- (23) 註3 hに同じ
- (24) 平川 南「墨書土器とその字形」『国立歴史民俗博物館研究報告』第
三五集 一九九〇
- (25) 註14に同じ
- (26) 註14に同じ
- (27) 長山泰孝「行基の布教と豪族」『律令負担体系の研究』一九七六
- (28) 註14の吉田論文
- (29) 栄原永遠男「行基と三世一身法」『国史論集』一九七二
- (30) 註3 eに同じ 本小論は、一連の「富永論文」に学ぶところが多い。
- (31) 高橋富雄「徳一と最澄」一九九〇
- (32) 鶴ヶ島町教育委員会『若葉台遺跡群』一九八四 斎藤 稔氏のご教
示による。
- (33) 註3 d・e・f 論文
- (34) 由木義文『東国の仏教』一九八三
- (35) 橋本澄朗「平安時代後期における仏教の展開に関する覚書」『栃木県
立博物館研究紀要』第九号 一九九一
- (36) 池田敏宏「武蔵における平安仏教受容の一樣相」『土曜考古』第一四
号 一九八九

(本学助教教授・国史学)